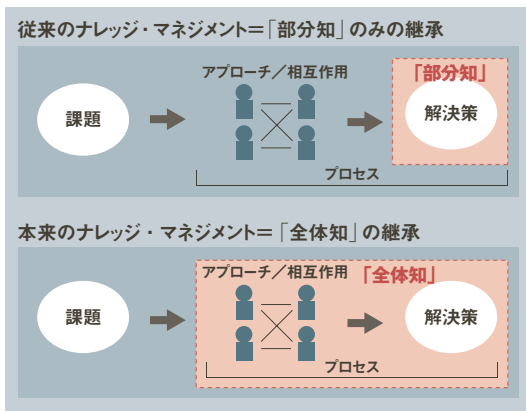


## 今、改めて求められる 知の情報基盤の確立

「2007年問題」という熟練者のナレッジ継承に関する課題、人材の流動化に伴うナレッジ維持の必要性がクローズアップされるなか、改めて知の情報基盤の確立が求められています。

これまでの「ナレッジ・マネジメント」は、人がもつ勘やノウハウといった、暗黙知“を他人に伝達可能な”形式知“に変換し、データベースに集めて共有するという考え方が一般的でした。しかし、この方法は必ずしも期待した効果が得られるものではありませんでした。本来、人の頭の中にある暗黙知は、常に変化し更新されるものであり、ひらめきや直観は曖昧なものであるにもかかわらず、それを静的な



ものとして形式知化して管理しようとしていたからです。

## 知の基盤として期待される コミュニティの場

そこで、注目されているのが、人の知は他人との相互作用によって変化し生み出される、という知のプロセスです。Webの世界では、さまざまなインターネット・コミュニティを通じて、不特定多数の人々が思いやアイデアを相互に発信できる環境が整いつつあります。また、ネット上での人の行動をたどる技術も向上し、発信される情報だけではなく、人と人、発信と発信の関連性を見出すことで、より意味のある知をリアルタイムで引き出せるようになってきました。

このように複数の人が自発的に集まってナレッジを高め合う「コミュニティ」の場は、ITを活用することで企業における知の継承にも応用することができます。

## 有効な知の継承の前提となる 「動的な知」の抽出

たとえば、組織や時間の制約があっても、相互作用を促す知的活動の場を提供することが可能です。また、その場において、どのような知的活動がなされたかという履歴を検索し、把握することもできます。

私たちは、このようなITを活用した

## IT・未・来・観・測

## Perspective View

# ITコミュニケーション時代 における知の継承

社内に点在する知的財産を蓄積・継承し、企業競争力の強化に活用していくナレッジ・マネジメント。日本ユニシスでは、“知の拠点”である大学などと連携しながら、知識や知的活動という「見えない財産」を管理するインフラの構築に取り組んできました。とりわけ、現代のような知識社会においては、知識の運用および活用が企業の重要な課題となっています。ここでは、知の継承を進めていく上でのキーワードとなる「動的な知」と、ITを活用したその継承方法について、ITソリューション部の倉田菜生子をご紹介します。



### 倉田 菜生子

日本ユニシス株式会社  
総合技術研究所 ITソリューション部  
アプリケーションイニシアティブ室長

1988年日本ユニシス入社。電力系・金融オンラインシステムの各種ミドルウェア開発に従事。1998年通商産業省（現経済産業省）が主導する情報化教育モデル学習システム構築事業に参画。以来、継続して産官学連携プロジェクトに携わる。2003年高等教育向けソリューション「RENAND」を開発。2006年より現職。

## 次世代に求められる 「全体知」の継承

「動的な知」を蓄積・継承することは、課題に対するアプローチの方法から、それによって導き出される解答までをトータルに継承する「全体知」の継承も可能とします。

意識せずに蓄積される膨大な人の活動履歴に、データマイニングや人工知能といったITを組み合わせることで、より価値ある知的要素を抽出し、継続的に全体知を成長させる——それが次世代に求められるナレッジ・マネジメントなのではないでしょうか。

知の継承の試みを、グループで課題解決に取り組む「学習の場」を通して実践してきました。そこでは、ある人の発言がどのようなプロセスで他者にどのような影響を与えたのかという相関分析や、リスクにつながるかねない事象の傾向分析も可能になってきました。

導き出された結果や成果物は「静的な知」であり、知的活動の一部にすぎませんが、プロセスや手段などの「動的な知」を「人の関わり方」や「ナレッジの変化」といった切り口から抽出できるようにするのはじめて、有効な知の継承が可能になると考えられます。